

群馬県議会 リベラル群馬

街頭演説 700日 県政の革命児!

後藤かつみ

県議会だより

vol.14

発行 リベラル群馬 後藤かつみ事務所
住所 高崎市八幡町800-24
TEL&FAX 027-343-1393
e-mail ccrgoto@af.wakwak.com

<http://www.ccrgoto.com/>

次代を見据えた政策転換を提言

9月定例議会

本会議 一般質問に登壇

若者の雇用対策の強化を提言

若年層(15～34歳)を完全失業率が7%を超え、若者を巡る雇用環境はまさに「超氷河期」の様相を呈しています。次代を担う世代にしっかりと「働く場」を提供しなければなりません。

しかし、群馬県は、進的な取り組みが全国的にも高く評価されている若者就職支援機関「ジョブカフェぐんま」ですら予算を減額している状況です。

後藤は、「それでは県独自で雇用対策に取り組む姿勢が全く見えない」と指摘し、体制強化を提言しました。

『伸びる芽』を育てる

産業政策への転換を

持続的な雇用の創出のためには、将来を見

据え、県独自に産業の「伸びる芽」を育てていくことが必要です。

後藤は、群馬の特徴

である豊富な森林資源を活かした自然エネルギー産業を創出するという切り口から提言。具体的には、温暖化対策で数十億円もの補助金をつぎ込んで間伐をしながら、伐採した木の8割が未利用のまま山に放置されている現状を改めるため、未利用木材を石油や石炭に



未利用間伐材の利用促進策を探り、森林整備の現場を歩き続ける後藤かつみ

(渋川市の現場にて)

人口減少・高齢化を見据えた公共事業の転換を

〈高齢者の「足」をどう確保するのか〉

全国有数の「マイカー王国」である群馬県ですが、10年後には4人に1人、20年後には3人に1人が高齢者(65歳以上)という超高齢化社会を迎えます。道路をせつせと整備しても、肝心の生活の「足」がないという深刻な事態が間近に迫っていると言えます。

交通軸構想」を掲げ、幹線道路の新設整備を精力的に行っています。その一方で、群馬県では既にH10年以降、働いて税金を納める「生産年齢人口(15～64歳)」が急激なペースで減少しています。今後、整備した道路の維持管理コストの負担が、将来世代に重くのしかかることは確実です。

後藤は、バス等の「公共交通」の振興策は道路整備と同様に公共事業の重要な柱として位置付けるといふ政策転換を早急に行わなければならないと指摘しました。

〈道路整備の「ツケ」を誰が負担するのか〉

大澤知事は「7つの

後藤は、現状でも県道(約3400キロ)を維持管理するために必要な事業量に対し、その半分も予算が確保されていないことを指摘し、新設よりも維持管理にウエイトを置いた公共事業予算に転換すべきことを提言しました。

大澤知事と白熱した政策議論を交わす後藤かつみ



地域住民と観光客の双方の「足」として活躍する路線バス「ハイカラさん」の取組みを視察する後藤かつみ
(会津若松市にて)

厚生文化常任委員会

(福祉・医療等の施策を審議する委員会)



介護現場の実態をくまなく調査する後藤かつみ

介護人材の
育成・処遇改善
に取り組む

福祉の根幹を担う介護職員は低賃金と劣悪な労働環境から離職率が高く、良質な福祉サービスに支障が生じています。リベラル群馬も、この危機的な状況の改善すべく、介護職員の処遇改善と人材育成を提言してきました。

今議会では、国の交付金を活用して県内の8割の施設で約15000円の賃金アップが図られ、また、

群馬県独自で介護現場のリーダー人材を育成する「ぐんま認定介護福祉士」制度も好評を受け定員を倍増するなど、施策を着実に推進していることが確認できました。

実効ある
自殺対策のため
追加事業を予算化

長期に渡る厳しい経済環境により自殺者が急増していることか

観光特別委員会

「体験型」観光
の完成度は？

H23年度に、県とJRの共同観光イベントである「ディスプレイ・キャンペーン(DC)」が開催されます。

後藤も、DCの成功事例と言われる会津の取り組みの現場を自主視察し、DCを一過性のイベントに終わらせないための施策を提言しました。

群馬DCは地域の農業や伝統工芸などに触れる「体験」を前面に押し出しています。こ

ら、後藤はそこに焦点を置いた対策が必要であることを提言してきましたが、9月補正予算において、メンタルヘルス対策の取れない中小企業の社員への対策事業が予算化されました。また、多重債務者への相談窓口でも保健師による精神面でのケアも同時に行うことで自殺を食い止める取り組みなど、実効ある施策が進展していることが確認できました。

指している意味で評価できます。

後藤は、会津での取り組み事例をヒントに、「体験型」観光を成功させるためには、①体験↓滞在・宿泊に繋げる仕掛けが必要であること、②各地域の「体験型」観光について、各地域の観光協会がバラバラに窓口となっている現状を改め、県内の窓口を一元化すること。の2点を提言しました。

これは、観光地のみが潤う従来型観光でなく、農村部を中心に地域経済全体が潤う観光を目指す

特に、窓口の一元化により、「首都圏で田舎暮らし体験をしたいなら群馬」というブランドイメージを積極的に発信できることから、県も研究に乗り出す意向を示しました。



大正浪漫調の街並みづくりによる商店街活性化の取り組みを視察する後藤かつみ (会津若松市「七日町通り」にて)

地域活動報告 (下小埇地区)

後藤かつみは、地域の安心安全の向上のために日々汗を流しています。皆様の地域の「声」をどんどんお寄せ下さい。

下小埇地区の新井団地は、烏川と隣接していることから堤防の補強対策が長年の課題でした。後藤は区長、地元の山田市議より要望を受け、H21年10月に陳情書を提出。その後、県と粘り強く折衝を続け、H22年度予算で予定を大幅に前倒ししての事業化が実現しました。安心安全な暮らしを求める地域の切実な声が行政を動かしたと言えます。

予算化が決まり、黒島区長・山田市議とともに現地にて今後の対応を協議



要望を受け、現地の状況を確認する後藤かつみ

